

令和 5 年度

「いわての復興教育」

実践事例集



令和 6 年 3 月
岩手県教育委員会

「いわての復興教育推進事業（いわての復興教育スクール〈沿岸〉）」実践事例

学校名：岩手県立釜石高等学校定時制

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校は釜石市の内陸側、仙人峠の麓に設置され、甲子川や五葉山など四季折々の表情を見せる自然に囲まれている。本校周辺では東日本大震災後、インフラの復旧や産業の再生等の復興事業が進んでいる。その一方で、震災から12年が経過し、徐々に震災の記憶や教訓の風化が危惧されている。

本校の生徒は、釜石市、遠野市、大槌町の3市町から通学しており、令和5年度の生徒数は14名（1月現在）である。他者との関わりや実体験が少ない生徒が多く、人々との触れ合いの中で、様々な体験を通じた学習が必要不可欠であると考えている。

これらを受け、本事業では教育的価値である「いきる」「かかわる」「そなえる」を育むことを目指して、「かけがえのない生命」「ボランティア・救護活動」「自然災害の様子と被害の状況」を主とした学校独自の復興教育に取り組んだものである。

II 取組の概要**1 第1回防災体験学習**

6月23日（金）に実施した第1回防災体験学習では、宮古市の「津波遺構たろう観光ホテル」の見学と山田町の「山田町体験プログラム」へ参加した。

午前中に訪問した宮古市の津波遺構たろう観光ホテルでは、はじめに、津波が来た時の映像を撮影した部屋まで階段を利用しながら登り、その途中、大震災によって破壊されたホテルの内部を見学した。その後、実際に大震災を経験した語り部の方から当時の状況を詳細に伺った。

実際に津波を撮影した部屋で映像を見ながらの説明であったので、臨場感が凄まじく生徒は語り部ガイドの説明を無言で聞くばかりであった。話を聞き終わった生徒たちの表情は固く重かったが、講話の後の質疑では多くの生徒が質問を行った。その生徒達の姿勢から二度と同じ失敗を犯してはならないという決意の強さを感じた。

午後は山田町に移動し、復興の進む町内を語り部ガイドの案内に従って歩いた。海辺の駐車場をスタート地点とし、地震が来た時にその場所から避難所

になった高台にある町役場に逃げるルートを歩きながら説明を受けたので、震災の時に町民の方々が避難した状況をイメージすることができて非常に貴重な体験をすることができた。

2 釜石高校（全日制、定時制）合同避難訓練

6月27日（火）に火災発生時を想定した避難訓練を、全日制、定時制合同で実施した。定時制教室は5階建て校舎の1階、2階部分に位置している。



たろう観光ホテル（震災遺構）の見学①

たろう観光ホテル（震災遺構）の見学②
（津波を撮影した部屋での映像を見ながらの説明）



語り部ガイドの説明を聞きながら山田町の街巡り

【生徒の感想】

たろう観光ホテルで見た映像が特に印象に残っている。目の前に広がるのどかな海があんなに恐ろしいものだとは思いませんでした。内陸出身で実際に津波を見ていない私ですら、映像を見た直後は言葉が出なかった。そして、自分がもしあの場に立っていたら逃げようとも思えないと感じた。自分の身を一番考えることは難しいと個人的には感じたが、もしまた大きな災害が起きてしまったら、その教訓を胸に刻んで行動したいと思う。

3 普通救命講習会

10月25日(水)、本校第一体育館にて「普通救命講習会」を実施した。釜石消防署職員の方に心肺蘇生法についてご指導いただき、胸骨圧迫(心臓マッサージ)の方法とAEDの使い方について学んだ。生徒たちは救急車が到着するまでの救命処置の重要性を理解し、真剣に救命訓練を行った。



救命講習での講師による心肺蘇生法の実演①



救命講習での胸骨圧迫の実習

【生徒の感想】

今日は1年ぶりに実習をしました。昨年よりはうまくできたような実感が少しだけありましたが、まだ、人を救えるまではいけないと感じたので、もし、何かあった時のために救えるように身につけたいです。また、119番に電話をしたことはあるが、心臓マッサージは実際にしたことがないので、覚えておきたいと思いました。

4 第2回防災体験学習

10月13日(金)に実施した第2回防災体験学習では、気仙沼市の「東日本大震災遺構・伝承館」と陸前高田市の「東日本大震災津波伝承館いわてTSUNAMIメモリアル」を見学した。

午前中に訪問した気仙沼市の震災遺構・伝承館は、気仙沼向洋高等学校跡地に建設された施設である。最初に、写真や映像等の資料を見せていただきながら、実際に大震災を経験した語り部の方から当時の状況を詳細に伺った。次に、大震災によって破壊された旧校舎内を見学した。津波によって押し寄せた瓦礫や自動車などがそのまま校舎内に遺されており、津波の凄まじい破壊力を目の当たりにした。また、散乱した教材やむき出しになっている天井裏や電気配線等、震災が残した実際の爪痕を見ることによって、震災当時の様子を生々しく感じた。遺構が私たちに伝える震災の凄惨さ、平和な日常がある日突然壊される不条理さが、生徒の心に重くのしかかっていることが、その表情から読み取れた。

午後に訪ねた陸前高田市では伝承館で語り部ガイドからの説明を受けると共に、プログラムの関係で短い時間ではあったが伝承館周辺施設の見学も行い、献花台や奇跡の一本松を見学した。そこには大

震災の凄惨さは見当たらず、穏やかで美しい自然が広がっているばかりであった。生徒たちの表情が幾分和らいだように感じられた。



気仙沼向洋高校（震災遺構）の見学①



気仙沼向洋高校（震災遺構）の見学②

【生徒の感想】

- ・今回で2度目の見学だったが、3月11日14時46分のまま止まった時計がある教室の窓から穏やかな景色が広がっている。そんな非現実的な光景は慣れないし、慣れてはいけないものだとも思う。館長がこぼした「どうしても風化してしまうんだけど」という言葉が脳裏にこびりついている。津波が来るとなれば情報が出るよりも先に逃げることで、普段から十分な備蓄をしておくこと、知識や教訓は命を守るという事、周りにも伝えていきたい。
- ・実際に東日本大震災を体験した身ですが、語り部の方のお話を聞くたびに胸が締めつけられ

ます。現実には起こった出来事かも知れなくなりません。

私たちは、これまでもこれからも海と共に生き、常に津波の記憶や悲しみを背負って生きていかなくてはいけない。ですから、先人たちが遺した教訓や今当たり前に暮らすことができている日常を大切にしていき「命」だけは守れるような行動をしていきたいと思いました。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

避難訓練と普通救命講習において、自分と他者の命を守るための術を学んだ。また、各生徒が自発的に考え、新たな発見をしたり課題を見つけたりすることができた。教育的価値「いきる」と「そなえる」を育むことができた。

第1回目の防災体験学習は、防潮堤や震災遺構の見学を通して自然の凄惨さを知ることによって自然と共生し、自他の命を守るために必要となる備えについて学んだ。主に教育的価値「そなえる」を育むことができたと考える。

第2回目の防災体験学習では、自然が持つ脅威と美しさ、という二面性を肌で感じることによって、自然との共生について考える契機になった。また、当たり前のように感じている日常や家族の存在、命の尊さ等について再確認することができた。主に教育的価値「いきる」「かかわる」を育むことができたと考える。

2 課題

東日本大震災発生当時、本校生徒の多くは幼かったため、震災の記憶が曖昧である。しかし今年度実施した様々な活動によって震災に関する理解や防災意識が高まった。今後は、これまでの学びを外に向けて発信し、震災の記憶が風化することを食い止められるような活動に発展させていく必要がある。

また、生徒が居住する地域では若者の流出により人口減少が著しいため、将来の地域の担い手を育成することも期待されている。そこで、次年度は今年度取り組んだ防災体験に加え、復興教育が目指す「かかわる」の「⑩自分と地域社会」に位置づけられるような取り組みとして、地域産業に関わる体験や学習を増やし、生徒が地域について理解を深められるような活動をしたい。